

カンキツ灰色かび病 (病原菌: *Botrytis cinerea*)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害である。

カンキツの葉、果実に発病する。通常、果実の被害が問題になる。花弁がいつまでも幼果に付着して腐ると、花弁の付着部分が傷になる。傷の多い果実は落果するが、傷の少ない果実は落果せずに残り、果実の肥大が進むとともに傷も大きくなり、果実の商品価値が低下する。

果実の病斑上で病原菌は増殖しないので、本病は二次伝染しない。開花期前後に雨が多いと発生しやすい。病原菌は多犯性の菌で多くの作物を犯すので、それらから伝染することも多い。温州ミカンなど花弁が落ちにくい品種で多発する。

なお、本病は貯蔵中に果実を腐敗させる貯蔵病害の一つでもある。

○ 防除方法

(ア) 耕種的・物理的防除

- ・付着花弁を払い落とす。
- ・多湿にならない栽培管理（通風、採光を良くする整枝、剪定、排水対策、密植を避ける）を行う。

(イ) 薬剤防除

- ・開花期、落弁期、生理落果期の間には1～2回防除を行う。



図1 花弁の発病
腐敗した花弁に灰色のかびが見える



図3 果実の発病
花弁の付着した部分が魚鱗状のかさぶたになる

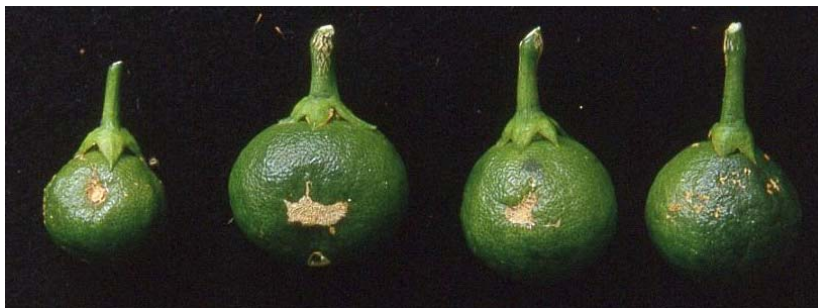


図2 幼果の発病
花弁の付着した部分の果皮がコルク状になる